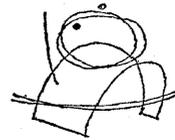


幼児の一日の活動について (三)

— 活動の変化を中心として —



神 沢 良 輔

上平 多美・石坂 昭子

坂倉 哉子・原田 花子

上之郷瑞代・森川 祥子

幼児の一日の活動について、これまで二回にわたってみてきた。第一回(十一月号)では、幼児の一日の活動について、その中にみられる幼児の要求とすることを中心として、その教育的意義や幼児の生活リズムとすることを含めて、一般的なことについてみてきた。そこで、第二回(十二月号)では、実際の保育場面における幼児の一日の活動はどうなっているかということを中心として、四日市市立泊山幼稚園での研究をもとに、その発達をみることにした。この研究は、幼児の一日の活動の中から、いわゆる「みずから選んで行なう活動」や「グループで行なう活動」の場面を中心にして、幼児の活動を観察したものであるが、第二回は、その結果の中から「幼児のはじめてとりくんだ活動」を中心としてみてきた。

そこで今回は、それにひきつづいてなされる「幼児のはじめてとりくんだ活動」のつぎの「幼児の第二にとりくんだ活動」と「幼児の一日の活動の全体的な変化」について「幼児の一日の活動の変化」ということからみていくことにする。

四、幼児の一日の活動の変化

(1) 幼児の一日の活動の変化の意味

幼児は登園してくると、まずなんらかの活動にはいる。もちろん、なにかしたいのだけれど、なにをしたらよいかということがうまくみつからなくて、身近にある遊具や素材を使って、ほんとうにしたい活動がみつかるまで、情緒の安定をはかりながら、い

わゆるウォーミング・アップ的な活動をしている幼児もいるだろうし、はじめから目標をもって活動にとりくみ、それに集中している幼児もいるだろう。いずれにしても、幼児はなんらかの要求や感情や意志をもって、つまり人間そのものとして、はじめてとりくむ活動へ入っていく。

そのようにして一日の幼児の活動がはじまるわけであるが、はじめてとりくむ活動は、当然つぎの活動になんらかの影響を与えているだろうし、つぎの活動はまたそのつぎの活動になんらかの影響を与えているだろう。そこに「幼児の一日の活動の変化」がみられる。

保育者としては、やはり、ひとりひとりの幼児の一日の活動の流れ（活動の変化）がどのようなになっているかというこの全体を見通せなくては、ひとつひとつの幼児の活動の意味もほんとうに理解したことはならないだろう。

逆にいえば、ひとつひとつの幼児の活動は、一日の全体的な活動の中に位置づけられてこそ、正しく理解したということになろうし、それがなくては、ほんとうの意味における指導がなされたということはいえないだろう。

もちろん、そこには、ひとりひとりの幼児の、また、学級全体の幼児の生活リズムがある。そして、それは、一日よりもっと長くて広い全体の生活リズムの中にさらに位置づけられ、それに

よって支えられて幼児は発達していることになろう。そこにも、もっと長くて広いサイクルの生活リズムがあるのである。

しかし、実際には、幼児の一日の活動が、もっともその基盤になるのである。そして、幼児の一日の活動の変化を理解することであり、その後においておこなわれる、いろいろの幼児の活動を理解することになるとともに、そのような一連の活動の変化を予測することにもなる。

このようにしてみると、幼児の一日の活動の変化を理解するということは、幼児の指導にとって、もっとも基本的な問題となる。

(2) 観察の手続

さて、これから、幼児の一日の活動の変化についての観察の結果をみていくことにするが、観察の方法は、ひと口にいえば、長時間見本法による自然観察法によったということになる。なお、この研究の観察の手続については、前号の「幼児のはじめてとりくんだ活動」で詳しくみてきたので、そちらを参考にしていただいて、ここでは省略することにす。ただし観察時間は、九時より十時二十分までの八十分である。

(3) 幼児の第二にとりくんだ活動

そこで、まず幼児は、「はじめてとりくんだ活動」のつぎに、どのような活動を選択するか、つまり「幼児の第二にとりくんだ活動」についてみていくことにする。

これについて、幼児はどのような活動を第二に選択し、どのような活動に多く参加したかについて、活動の種類ごとに参加者数を示すと第3表のようになる。また、全体的にみて、どのくらいの時間第二の活動にとりくんだかについて、その持続時間の算術平均と標準偏差を示すと第4表のようになる。

なお、幼児の活動の種類については、前号の第1表と同じ類型にしたので、具体的な活動については、第1表を参照していただきたい。また、二月は、幼児のはじめてとりくんだ活動が、そのままその日の主要な活動となり、第二にとりくんだ活動の意味があまり認められなかったので、第3表では二月を省略することにした。さらに、はじめてとりくんだ活動のみで、観察時間に他の活動をしなかった幼児については、その活動をもって、第二にとりくんだ活動とみなして集計してある。

第3表 幼児の第二にとりくんだ活動の種類と参加者数

種類	月			
	5	7	10	12
	参加者数	参加者数	参加者数	参加者数
A リズミカルな集団あそび			0(7)	
B 運動遊具による活動	2(9)	5(7)	0(6)	4(0)
C 構成的素材による活動			1(0)	4(1)
D 可塑的素材によるあそび	4(1)	1(3)		
E ごっこ(役割あそびも含む)	1(2)	8(0)	12(2)	
F 絵画製作的な活動	1(2)	1(7)	0(2)	7(15)
G ₁ 絵本			0(1)	
G ₂ トランプ				1(0)
G ₃ こままわし				
G ₄ レコードをきく	3(0)		0(2)	
G ₅ 合奏および劇的な活動	1(0)	0(3)		
G ₆ 野外の雑草であそぶ	2(0)		2(0)	
H 人のあそびをみている	1(3)	2(0)		
N	15(17)	17(20)	15(20)	16(16)

注 () 内は女兒を示す。なお、2月は第2のあそびがすくないので除く。

第4表 幼児の第二にとりくんだ活動の持続時間(分)

算術平均 (標準偏差)	月				
	5	7	10	12	2
	18.4 (12.5)	34.6 (22.7)	38.3 (15.6)	42.5 (17.2)	61.2 (19.1)

さて、これらの表から、幼児の第二にとりくんだ活動について、幼児のはじめてとりくんだ活動と同様に、幼児の発達を中心にしてみていくことにしよう。

(i)

自分の身体的な生活リズムにあわせて第二の活動を選択する(五月〜七月)

① 五月から七月にかけては、幼児は、登園して「はじめてと

りくんだ活動”で情緒を安定させ、いわゆるウォーミング・アップがなされると、つぎに戸外での活発な活動に集中していく傾向が強く、とくに、五月においては、はじめてとりくむ活動が、いろいろな活動に平均して分かれて活動しているのに対して、著しく様相を異にしている。しかも、活動の持続時間についての算術平均をみると、はじめてとりくんだ活動（二十六分）より短くなっている（十八分）のは興味深い。

② つまり、はじめてとりくむ活動で、なにかの活動をしたという要求により、保育室内の積木などの構成的な素材や、ねんごなどの可塑的な素材による活動や、製作的な活動という、どちらかといえば情緒の安定ということを中心とした活動をしていた幼児たちは、そこで一応の感情の表出をすると、つぎに、第二の活動として、幼児たちの生活リズムとして、活発な活動を要求し、そのような活動を選択していくことになるようである。

すなわち、入園当初は、静と動、緊張と解放、室内と室外というような、どちらかといえば、身体的なリズムによって、第二の活動を選択しているといえる。

③ だから、はじめてとりくむ活動と、第二にとりくむ活動との間に、活動の発展としての直接的な関連は認められないということになる。保育者は、このような幼児の発達の特徴をよく理解して指導する必要がある。

④ つまり、この時期では、幼児のはじめてとりくむ活動から、第二の活動へ連続的に発展させることには、相当のむりがあるということになる。それより、むしろ個々ばらばらで連続的ではないが、ひとりひとりの幼児のそれぞれの活動をじゅうぶんにさせてやるとともに、保育者は、幼児の身体的な生活リズムにあわせて、緊張と解放、静と動という組み合わせによるいろいろな活動がじゅうぶんできるように用意しておいてやることの方がたいせつである。

(ii)

はじめてとりくむ活動と、第二にとりくむ活動との間に
関連ができ、活動の内容が連続する(十月～十二月)

① 七月でも、はじめてとりくむ活動において、構成的素材(積木)による活動をしていた男児が、そのまま「ごっこ」へと活動を発展させているというように、構成的素材が媒介になって、第二の活動へ連続しているということが一部でみられる。

② 十月になるとさらに発達して、はじめてとりくんだ活動の発展としての第二の活動がみられ、はじめてとりくんだ活動から第二の活動へと、連続して変化していくようになる。このような傾向は、十二月においてはいっそう顕著になってくる。

③ だからこの時期では、保育者は、幼児のはじめてとりくむ活動から、連続して第二の活動へと発展できるように、環境を準

備してやったり、援助してやる必要がある。そのため、保育者には、つぎの活動を見通す能力が要求されるだろうし、幼児の活動は、その中で深まり広がっていくだろう。

④ また、この時期になると、幼児の活動は、今日から明日へと連続して発展するし、幼児によって、またはその日の生活リズムによって、はじめてとりくんだ活動と、第二にとりくんだ活動のどちらかが、その日の主要な活動になることが多いので、そのことも考慮に入れて指導することがたいせつである。

(iii)

はじめてとりくむ活動がそのまま一日の活動の主要なものになり、第二にとりくむ活動の意味がなくなる。

(二月)

① 十二月ごろからみられることであるが、幼児は、『絵画製作的な活動』などのように、集中して相当長時間を要する活動などでは、はじめてとりくむ活動が、そのまま一日の活動の主要な部分を占めるということになる。

このような傾向は、さらに発達して、二月になると、大部分の幼児にとって、はじめてとりくむ活動をそのまま長時間続けるということが可能になり、第二にとりくむ活動の意味はさらにうすれてくる。

③ だから、この時期においては、幼児の一日の活動におい

て、幼児のはじめてとりくむ活動の意味がきわめて大きいということができるとともに、幼児が集中してひとつの活動にとりくむことができるように、保育者のはたきかけや幼児の活動の見通し、またそれにもとづく環境の設定がきわめてたいせつである。またそれは、幼児の活動が、昨日、今日、明日という時間的連続の中で連続して発展しているためであり、昨日の活動の連続として、今日のはじめてとりくむ活動に幼児が集中してとりくんでいるのであるということを理解しておく必要がある。

④ だから、外面的には同じようにみえる一日の幼児の活動の流れについても、幼児のこのような活動にとりくもうとする構えやその質、また集中力において、幼児の発達によって著しく相違のあることを保育者はよく理解するとともに、このようなことは、幼児の自己をじゅうぶん表現していく活動のなかでしだいに発達してきたものであることに留意すべきである。入園して以来、幼児に自己をじゅうぶん表現したいという要求を満足させ、そのためにじゅうぶんの時間を与えてやらなければ、幼児が集中して活動するということが可能になるということを保育者は、幼児の指導にあたって、まず念頭におくべきである。

(4) 幼児の一日の活動の全体的な変化

最後に、幼児の一日の活動の変化について、ここでは、幼児の

第5表 幼児の一日の活動の中で活動の
かわった回数、最高・最低持続時間

		活動のかわ った回数	最低持続 時間	最高持続 時間
5	月	3.8 (1.1)	11.5 (4.2)	38.4 (11.6)
7	月	2.4 (0.9)	28.0 (22.3)	54.8 (15.8)
10	月	2.5 (0.2)	24.4 (18.5)	46.3 (14.5)
12	月	2.2 (0.8)	28.1 (29.8)	50.0 (19.1)
2	月	1.5 (0.6)	60.0 (27.5)	67.9 (11.3)

注 () 内は、標準偏差を示す。持続時間
の単位は分で示す。

つまり、五歳児一年保育の幼児の幼稚園における一日の活動を、幼児の自己をじゅうぶん表現する活動を中心にして、活動の持続時間と活動のかわった回数、および、それぞれの活動の持続時間という面からみると、幼児の発達は、入園当初の五月までと、七月から二学期にかけ

自己をじゅうぶん表現する活動の中で、幼児が活動をかえた回数、それらの活動のなかでの最高、最低の活動の持続時間という全体的な面からみていくことにする。

なお、前述のそれぞれについて、算術平均および標準偏差を中心にして示すと第5表のようになる。

また、参考のために、幼児の一日の活動の変化を、個人を単位として、選択した活動の種類およびその順序、活動をかえた回数、最高、最低の持続時間について示すと第6表のようになる。

さて、この表についても、これまでと同様に、幼児の発達を中心にしてみえていくことにする。

て、および三学期と、大きく三つの段階に分けて考えることができる。

(i)

情緒の安定のため、いろいろな活動をしてみたい

(五月)

① 入園当初においては、幼児にとっては、情緒の安定化のために、いろいろな活動をするということもたいせつなことであるが、それと同時に、自分のほんとうにしたい活動をさがしてみることもたいせつである。五月まではそのような段階であろう。

② つまり、そのことは、活動のかわった回数の平均が四回もあり、また、最低持続時間の平均が十分であるということからもうかがえよう。

③ それは、活動のしかたがわからなかったり、環境になじめないということや、交友関係がうまくいかないというような理由によることもあろう。

④ しかし、そのために、保育者はこのような幼児の実態にあわせて、いろいろな活動がじゅうぶんできるよう、幼児のために用意しておいてやることは必要である。幼児は、このようないろいろな活動を通して、やがて見通しをもって活動をするようになるのである。このことは、第6表からもうかがうことができるであろう。

第6表 幼児の一日の活動の変化についての種類と変化の回数、最高・最低持続時間

氏名	5月			7月			10月			12月			2月			
	活動の種類	回数	最低持続時間	活動の種類	回数	最低持続時間	活動の種類	回数	最低持続時間	活動の種類	回数	最低持続時間	活動の種類	回数	最低持続時間	
1	B-G4-B-B	4	10~30	C-B	2	20~60	B-E-D	3	20~40	B-B-F	3	20~40	G5	1	80~80	
2	B-G4-B-B	4	10~30	C-B	2	20~60	B-E-D	3	20~40	B-B-F	3	20~40	G5	1	80~80	
3	H-D-B	3	10~40	C-B	2	20~60	B-E-D	3	20~40	B-B-F	3	20~40	G2-F	2	20~60	
4	E-G6-E	3	10~40	C-E	2	20~60	F-E	2	20~60	G3-C-F	3	20~40	G2-E	2	20~60	
5	A-D-E	3	10~40	C-E	2	20~60	F-E-B	3	20~40	G3-C-F	3	20~40	G5	1	80~80	
6	D-H-B-B	4	10~30	E	1	80~80	F-E-B	3	20~40	A-F	2	40~40	G5	1	80~80	
7	H-D-B	3	10~30	D	1	80~80	欠		F-F	2	40~40	G2-E	2	20~60		
8	欠			D-B	2	20~60	B-E-D	3	20~40	B-B-F	3	20~40	G5	1	80~80	
9	C-G5-G6-E	4	10~30	E	1	80~80	欠		F-F	2	40~40	G2-G5	2	20~60		
10	B-G4-B-B	4	10~30	C-B	2	20~60	B-E-D	3	20~40	C-F	2	40~40	G5	1	80~80	
11	C-D-E	3	10~40	C-H-D-F	4	20~20	F-E	2	20~60	C-F	2	40~40	欠			
12	B-B	2	30~50	C-E	2	20~60	欠		C-F-F	3	20~40	G5	1	86~80		
13	E-G6-E	3	10~40	C-E	2	20~60	C-G6	2	20~60	C-F-E	3	20~40	D-G5-E	3	20~40	
14	A-F-G6-B	4	10~40	C-E	2	20~60	F-E-G6	3	20~40	G3-C-F	3	20~40	F-G5	2	40~40	
15	B-B-E-B	4	10~30	D-F	2	20~60	F-E-B	3	20~40	G3-C-E	3	20~40	G2-G5	2	20~60	
16	欠			C-H-D-F	4	20~20	H-E	2	20~60	G3-C-F	3	20~40	G2-G5	2	20~60	
17	C-E-G6-E-E	5	10~30	C-E-E	3	20~40	C-G6	2	20~60	C-F-E	2	40~40	D-G5-E	3	20~40	
18	H-B-F-B-E-B	6	10~30	D-F	2	20~60	B-E	2	20~60	E-F	2	40~40	G5	1	80~80	
19	E-B	2	20~60	C-B-F	3	20~40	B-A-F	3	20~40	F	1	80~80	G5	1	80~80	
20	E-B	2	20~60	F-R-F	3	20~40	E-A	2	20~60	F	1	80~80	G5	1	80~80	
21	G4-B-F-G4-H-B	6	10~30	D-G6-F	3	20~40	B-A-E	2	20~40	A-F	2	40~40	G5	1	80~80	
22	欠			F-B-E	3	20~40	E-G4	2	40~40	F	1	80~80	G5-E	2	20~60	
23	A-B-G6-B	4	10~40	F-F-F	3	80~80	B-B-A	2	20~40	欠		欠		G5-F	2	20~60
24	A-E-D-B	4	10~40	D	1	80~80	B-A-F-E	4	20~40	A-F	2	40~40	G5	1	80~80	
25	G4-B-B-G4-E	5	10~30	C-B-E	3	20~40	B-A-F-E	4	20~40	A-F	2	40~40	G5	1	80~80	
26	A-B-G6-B	4	10~40	D	1	80~80	B-B-A	3	20~40	欠		欠		G5	1	80~80
27	欠			F-F	2	20~60	F	1	80~80	F	1	80~80	欠			
28	欠			F-B-G1	3	20~40	F-G4	2	40~40	欠		欠		G5	1	80~80
29	H-B-F-B-E-B	6	10~30	D-F	2	20~60	B-F	2	20~60	E-F	2	40~40	G1-G5	2	40~40	
30	H-D-C	3	20~40	F-F	2	20~60	F-B-F	2	20~40	H-F	2	20~40	G1-F	2	40~40	
31	A-E-G4-B	4	10~30	F-F-F	3	20~40	E-A	2	40~40	F-C-F	3	20~40	G5	1	80~80	
32	D-F	2	10~70	F-B-G1	3	20~40	F-G1	2	40~40	F	1	80~80	G5	1	80~80	
33	D-F	2	10~70	F-B-G1	3	20~40	B-B-A	3	20~40	F	1	80~80	G5	1	80~80	
34	D-H-B-B-F	5	10~30	H-D-F	3	20~40	B-B-F	3	20~40	H-F	2	20~60	G5	1	80~80	
35	E-H-D-H-E-C	6	10~20	F-G5-H-F	4	20~20	E-B-F	3	20~40	E-F	2	20~60	G5	1	80~80	
36	D-H-B-B-G5-F	5	10~30	F-B-G1-C	4	20~20	B-A-E	3	20~40	欠		欠		G5	1	80~80
37	G4-B-B-G5-F	5	10~30	D-G5-F	4	20~40	B-A-E	3	20~40	A-F	2	40~40	G5	1	80~80	

(注) 活動の種類のア～Hの記号については第3表と同じであるので第3表を参照されたい。最高・最低持続時間の単位は分です。

(ii)

要求している活動はじゅうぶんにするとともに、他の活動もしてみたい
(七月～十二月)

① 七月ごろになると、幼児たちは、自分の要求する活動をもつて登園してくるようである。

② このことは、ひとつの活動についての最高持続時間の平均が、五十分前後になっていることからわかる。つまり、幼児は自分の要求する活動へは、相当長時間とりくむことが可能になってくるのである。

③ しかし一方、活動をかかわった回数が平均して二回以上あるということや、最低持続時間が平均して二十五分程度であるということとは、幼児にとっては、他の活動も一回程度必要であるということを意味している。

④ それは、ある幼児にとつては、ウォーミング・アップとしての活動が必要である場合もあろうし、逆に、要求している活動で自己をじゅうぶんに表現したあと、緊張の解消としての他の活動を必要としている場合もあろう。そのために、一日にふたつぐらの異った、または相似した活動を要求しているということがいえる。

⑤ これらの活動の質については、第二にとりくんだ活動のところでみてきたように、幼児の発達によってその差異が認められ

る。つまり、七月では、幼児の身体的な生活リズムを中心に、活動が変化しているのに対して、十月以降においては、ふたつの活動は主として連続の中で選択されるという傾向にある。

⑥ いずれにしても、保育者としては、このような活動の変化をじゅうぶんに理解して、幼児の活動を指導していくことが必要である。すくなくとも、第6表でもみられるように、大部分の幼児が四十分～六十分は集中して活動にとりくんでいるのだから、七月においてももちろんであるが、とくに十月以降においては、活動が連続して発展させられるように、活動の見通しをたてて、じゅうぶんに環境を用意しておいてやるとともに、活動を中断させないように配慮してやる必要がある。

(iii)

集中してひとつの活動にとりくみたい
(二月)

① 二月になると、最低持続時間と最高持続時間の差がなくなり、平均して六十分～七十分となる。これは、活動のかわった回数が平均して一・五回になったということからもうかがえる。

② つまり、ほとんどの幼児が、活動をあまり変化させることなく、集中してひとつの活動をするということがいえる。

③ いずれにしても、大部分の幼児が自分の要求する活動を集中して最後までできるということである。そして活動を移動している幼児も、第6表のように、劇的な活動というひとつの目標の

もとの活動を变化させているということであり、実際には、目標をもって自分の要求を最後までしたということになる。

④ そのためには、保育者としては、第二にとりくんだ活動でみてきたように、幼児の活動の連続と発展ということをじゅうぶん見通して、適切な援助を与えてやる必要がある。

(5) 幼児の一日の活動の変化についての指導上の留意点

この号では、これまで、幼児の一日の活動を、いわゆる幼児の自己をじゅうぶん表現する活動に限って、幼児の活動の変化を、幼児の第二にとりくんだ活動と、幼児の一日の活動の全体的な変化について、観察の結果から、幼児の発達という面を中心にしてみてきたが、これらのことからいえる指導上の留意点を以下に簡単にまとめてみよう。

① 入園当初においては、幼児は情緒の安定化のためにいろいろな活動の中から、自分の要求する活動をみつけだそうとする模索のための活動が多い。そのため、これらの活動の間に連続性をみとめることは困難であり、幼児は自分のもっている身体的な生活リズムにしたがって、つまり、静と動、緊張と解放というようならリズムにしたがって活動することが多い。

だから保育者は、このような幼児の要求をじゅうぶん満足させてやるために、いろいろな活動がじゅうぶんできるよう、室外

においても室内においても、いろいろな素朴な遊具や素材をじゅうぶんに用意しておいてやるのがたいせつである。

② やがて幼児たちは、自分の要求する活動をみつけ、それに集中してとりくむようになる。十月以降においては、はじめてとりくんだ活動の間に関連ができ、活動の内容が連続するようになる。しかも、活動の変化が平均して二回程度であるから、はじめてとりくんだ活動と、第二にとりくんだ活動で、一日の活動が成立していくということになる。そして活動に集中できる時間も、四十五分程度とかなり長くなっていく。

だから、保育者としては、活動の連続と発展ということを見通して指導することがたいせつである。そのためには、幼児の活動を、昨日、今日、明日という連続と、一日の活動の中の連続という二面から理解していくことが必要であり、とくに、前日の幼児の活動のなから、幼児の集中してとりくんだ活動を中心に、翌日の環境を設定してやるとともに、幼児の活動が持続し、集中し、発展できるように、活動をできる限り中断しないようにすることがたいせつである。しかし、幼児の他の活動もしたいという要求もまだもっているのです、その要求にもこたえてやらなくてはならない。

③ このようにして指導していくと、やがて幼児は、集中してひとつの活動にとりくむようになってくる。とくに二月において

はその傾向が強く、学級全体の活動の目標も理解するとともに、グループ（原則として四～五人が発達からみてもっとも安定している）にわかれて、その目標を表現したいという要求もでてくるようになる。

保育者としては、このような幼児の要求をじゅうぶん満足できるように、グループと全体との関係を調節してやるとともに、ひとつひとつのグループに対して、全体の幼児の活動が見通せるよう、じゅうぶん援助をしてやる必要があるとしよう。

そこで、もう一度これらの指導の基盤になっている、入園以来の、幼児の自己をじゅうぶんに表現したいという要求を満足させてやることや、幼児の一日の活動中での、くり返してする活動をついていく必要がある。つまり、活動の発展といっても、それは、毎日くり返しの中で、大部分はわずかずつ変化していくものである。

五 おわりに

これまで三回にわけて幼児の一日の活動についてみてきた。

つまり、第一回（十一月号）では、幼児の一日の活動について、幼児の要求を中心に、主として理論的な面から、第二回

（十二月号）では、幼児のはじめてとりくんだ活動について、今回は、幼児の一日活動の変化についてみてきた。しかし、まだ、幼児の一日の活動と、週、月、学期、一年というもっとも長期にわたる活動との関係や、一日の幼児の活動の中で自己表現的な活動と学級全体とする活動との関係、幼児の一日の活動の中でのくり返してする活動について実践面からみた問題点など、まだまだ基本的な多くの問題については、じゅうぶんに考察していくことができなかった。これらの問題についてはまたの機会にゆずりたい。

いずれにしても幼児の一日の活動について三回に分けてみてきたが、これらはいずれも相互に深い関係があり、とくに指導上の留意点については全体のまとめを省略したので、それらをまとめて考えていただければ、実際の指導の上でなんらかの参考になるのではないかと思っている。

（完）

（註）以下の文献も参考にしてください。

1 日本保育学会 第22回大会研究発表集 頁15～16 昭44

2 四日市市立泊山幼稚園 幼児にのぞましい経験や活動を

もたせるには —— 保育の過程を中心にして —— 昭44

沢神良輔・（四日市市立納屋幼稚園）

（上平多美（橋北幼）・石坂昭子（泊山幼）・坂倉哉子（富田幼）
原田花子（海蔵幼）・上之郷瑞代（泊山幼）・森川祥子（泊山幼））